

下つ巻 反正天皇

一、弟いろと オトとも訓める。イザホワケ（履中）の段の冒頭（一八八頁）に「子」とあるのと同じく、ここにも「弟」とある。イザホワケの同母弟である。

一、天皇の年齢の数え方と一年二歳説（尾崎左永子「新訳古事記」）

○「古事記を読み来たりて、ここのあるたりで氣付き、かつ思うのだが、仁徳天皇の事蹟に比べて、この履中、反正天皇あたりの表現が、かなり粗あらく少ないことが氣になる。仁徳天皇の皇統譜がとくに詳しいのは、その勢力、血脉が後世につづくせいもあるのだろうが、この辺の帝てい紀、本辭の類はあまり詳細に伝承されていなかつたのかもしけない。

もうひとつ、年齢の数え方の問題がある。このあたりでは暦法による記載がちゆう注ちゆうせられていて、その崩御の年と年齢を列記すると

成務天皇 <small>せいむ</small>	西暦三五五年（？）	九十五歳
仲哀天皇 <small>ちゅうあい</small>	三六二年	五十二歳
神功皇后		百歳
応神天皇	三九四年	百三十歳
仁徳天皇	四二七年	八十三歳
履中天皇 <small>りちゅう</small>	四三二年	六十四歳
反正天皇 <small>はんぜい</small>	四三七年	六十歳

という比定がなされている。しかし仁徳天皇以前はまだ模糊もことしていて、たとえば神武天皇百三十七歳、崇神天皇百六十八歳、景行天皇百三十七歳、と業績の多い天皇はそれだけ長命になつてている。このことについては、さまざまな研究がなされているが、その一説に、農耕社会では春を一歳、秋を一歳と数える習慣だったのではないかという、民族學の方面からの指摘がある。

もつとも日の短い冬至を中心とした「こもり」の時を経て、少しづつ日が伸び、草木が芽吹き、桜の咲く春。この花さかりに「花見」をして人々のエネルギーを凝縮ぎょうしゆくし、秋のゆたかな「稔り」を予祝する。種粒たねもみを育て、梅雨つゆの雨の中で稻の苗を植える。早苗さなえ、皐月さつき、早乙女さおとめ、五月雨さみだれ、ここに冠かんされた「さ」は、たんなる接頭辞ではなく、「神圣しんせい」という意味があり、「稻の穀靈こくれい」を意味するともいう。それは「さくら」も同じで、「さ」は穀靈、「くら」は

「座」で、あの五弁の小さな花のひとつひとつに、稻の靈が座つてゐるという考え方があつたとのである。その穀靈に対し、皆がエネルギーを添え、秋の収穫を祈るからこそ「花見」であるという。「見る」とは、相手に力を与えることなのである。

そして暑い夏。日照りの下で農耕民は黙々として働く。女はその間に、糸を作り、機を織る。麻を育て、綿を紡ぎ、蔓を打ち、支配者のために蚕を飼い、絹を作る。日々の炊事も、恋も、子育ても、現代からは想像もつかない荷^か酷^くさがあつた。だからこそ祈りも切実であつただろう。やがて秋の穫りがもたらされ、まず神前に新しい初穂^{はつほ}を供えて感謝する「新嘗」（のちには「にいなめ」と転訛^{てんか}）の祭が、宮中を中心におこなわれる。まさに収穫祭である。そして人々は次の段階の種糲^{たねもみ}の準備をし、薪を集め、冬ごもりに入るのである。

この春と秋を中心とする「春秋」のめぐりを、古代の人は一歳とせず、二歳と数えたのではないか、というのである。たしかに、古代から「春山の霞壯夫」「秋山の下氷壯夫」のような「春秋あらそい」の系譜があつて、その伝統は「萬葉集」にも「古今集」にもつづき『源氏物語』の「春秋あらそひ」につづいている。春と秋とどちらが好きかというのだから、結論が出ないし、勝負もつかない「淨い」であつて、これも「見る」と同じく、いわゆる「心寄せ」の行事化した形であろう。

この「一年二歳説」は、とくに定説化しているわけではなく、反対の説も多いのだが、いま、この「履中記」「反正記」に関して思うに、反正天皇の崩年^{ほうねん}「六十歳」にして正式に記載されている妃^{きよみ}が、丸邇^{まるに}の臣の女一人のみ、その御子四柱のみ、というのは些^{すこ}かおかしい。これが半分の三十歳ならまだしも理解のうちだが。何よりもこれから先、仁德天皇の後継者の間で起ころる皇位繼承争いのつづく中で、時代はしだいに歴史的な事実と符合していくのだが、そのうえでなお、あくまで歌物語として受けとめる筋を外すまいとする思いが肝要であることは言をまたない。

三、木梨之^{きなし}輕^{かるの}主

木梨は地名か梨の一種か不詳とされるが（「記伝」）、実の妹に密通した話が次にかたられてゆく点から、キナシは柵無^{さきなし}、つまり実の兄と妹との間をへだてる垣をふみ越え、それを無くするのにもとづく名に相違ない。キナシノ王とは、実の妹をひそかに恋した物語とわかちがたい名であることが納得される。万葉集に

○「刈り薦^{こも}の一重を敷きてさ寝れども君とし寝れば寒けくも梨」（万一一・二五一〇）（刈り薦の敷物一枚だけで寝ているが、あなたと一緒に寝てるので寒いこともありません。）

○「大^おき海に立つらむ波は間^{あひだ}あらむ君に恋ふらく止む時も梨」（万一一・二七四一）（大海に立つ波は、止む間もあるでしょうが、あなたに恋することは、止む時もありません。）とある」とく、「無し」を借字「梨」であらわす例があるので木梨＝柵無とする考えを支えることになる。

四、境之黒日子王　境は大和地方の地名、黒日子は下の八瓜やつりの白日子王と対をなす名。この二人がともに雄略に殺されるのは次の安康記（二〇一頁）に見る通りだが、雄略紀には坂合黒彦と記し、さらにその焼き殺されたとき、坂合部連贊宿禰やまとというのがこの皇子の屍を抱いたとある点から、「記伝」はこの人は乳母方のもので、境は乳母の姓かといつている。

五、軽大郎女　兄の軽王かるのみこと対をなす名だが、兄の方だけに「木梨之」とあつてここにそれがないのは、禁を破る嘗為にさいし、妹はどこまでも受身の立場と見てることによる。古事記編集者の纖細な感性がうかがえる。

六、友緒とものを　伴の緒、伴の男とも記す。一定の職業で朝廷に仕える人。特に男子（広辞苑）。

○「鞍掛わきかる 伴の男とも 広き 大伴に 国榮さかえむと 月は照るらし」（万七・一〇八六）（鞍を負う勇士の多いお大伴の地に、国が榮えるようにと、月は照つているらしい。）

七、姦たはけて　「姦」が本字、字音はカン、ケン。字義は、よこしま、わるい、心がねじけて正しくない、いつわる、盗む、みだす。おかす、みだら、淫行いんこう。